

堀川で 船遊び・魚釣り

殿様・お姫様の船遊び

二代藩主光友：万治4年(1661)

城から馬で堀川まで行き、朝日丸という御座船に乗って堀川を下っていった。御伴の船は数隻だが、おびたしい数の近習や諸役人が堀川兩岸を歩いて御伴をし、見物の人もたくさん集まって「押し分けがたし」という状態だったという。

熱田に着くと、新たに造り替えられた新義丸に乗り換え、漁師たちが網や釣りで漁をする様子を見物したと記録されている。

聖聡院(9代藩主宗睦の養子治行の夫人)享和2年(1802)9月

惣河戸そうかわど(現：景雲橋)で御座船さいげきまる彩鷺丸に乗り、31隻の船隊で熱田前新田まで下っていった。この風景は『御船御行列之図』に描かれて今に伝わり、堀川の長い歴史のなかでも一番豪華絢爛たるイベントであった。白鳥の御船蔵で昼の休憩をし、熱田の海で漁師が漁をする様子を見物したという。聖聡院はずいぶんお気に召したようで、10月にも再び船遊びを行っている。



幕を引き上げ堀川岸を眺める聖聡院
『御船御行列之図』(名古屋市博物館蔵)

庶民の船遊び

初期の頃は月を愛でる月見舟、後に桜が植えられると花見舟が繰り出した。

『尾張年中行事絵抄』には住吉神社の祭礼について、「今宵、神楽あり。此社は、船乗どもの信仰多くして、献燈数多あり。堀川の月見ぶねに、一しほ賑々し」とあり、たくさんの月見船が出ていたことがうかがえる。



堀川に四ツ乗(小型船)や屋形船が繰り出している
『尾張年中行事絵抄』(東洋文庫蔵)

魚釣り

堀川は魚がたくさんいた。

『小治田之真清水』には堀留まで鰹や鯛が上ってきたとあり、『俳諧昼寝種』には伝馬橋での句として「月見舟漕わかれくる鯛かな」が収録されている。

「堀川及び江川に産する魚類、はえ・鮒・鰻・河鹿などは頗る美味にして、他に産するもの、及ぶ所にあらずと云ふ」と絶賛しているのは『尾張志』だ。

評判の良い堀川の魚だから、商売にする人も出てきた。弘化元年(1844)4月に袋町三丁目(現：中区錦二)の丸屋庄七が堀川や荒子川で捕った銀ブナを佃煮にして売りはじめた。風味が良いと評判になり「堀川はえ」と呼ばれ、明治末まで堀川産の銀ブナを使用したという。



一杯飲みながら花見を楽しむ
『桜見与春之日置』(名古屋市博物館蔵)